

「あおぞら」創刊号
(H3.2.25発行)

特集「親に聞く」

事務局長 明石洋子

「かわいそう」という見方について

—「同情」より「理解」の関係づくりを—

少しでも多くの方々に「あおぞらハウス」の設立の趣旨と現状を知っていただき、理解を深めて欲しいとの願いで、会報を発行することになり、編集委員から、会報の構成の一つに、特集「親に聞く」というテーマでシリーズ化したいとの話が出ました。「親の生き方や思い、そして伝えたいこと」を書いて欲しいとの私への要望ですが、さて何を書こうかと迷いましたら、職員と私との間に交わされている連絡帳の中より、「『かわいそう』という見方」について、論議した話を載せたいとの要請で、連絡帳より転記しました。

さて、その内容を書く前に、この話題が出た背景を説明しますと、昨年夏、徹之が、太陽堂でアルバイトをすることになり、地域の方々への御理解と御支援をいただくため、B4一枚の大きさの「徹ちゃんだより」を作成しました。(次頁に縮小して「徹ちゃんだより」を載せておきます。)書いたきっかけは、徹之が、近所のお店に入って、大好きなトイレ掃除をしたりして、御近所の方々をびっくりさせましたので、太陽堂の社長さんが、「これからもずっと働いてもらいたい。それで、徹之君のことを近所の人達に理解してもらうよう、お母さんの方からご挨拶して欲しい。」との御要望があり、それでは、御迷惑をおかけしたお店だけでなく、御近所それに、太陽堂に買い物に来てくださる中学校、はじめ地域の方々に広く、徹之の様子をお知らせし、さらに、障害者が就労することへの理解を深める糸口になればと思って、徹之と一緒に「徹ちゃんだより」を書きました。それを私と徹之と職員とで、地域の人々に配った感想が、職員から連絡帳に書かれたものです。では、連絡帳より、

徹ちゃんだより

No.1

(平成二年8月31日)

「地域の中で、共に生き、共に学び、共に遊び、共に働き・・・あたりまえに、人として争せになって欲しい」と、親として願い、そしてそのように育ててまいりました。地域の方々のご理解と励ましと、さらに、有り難いことに豊富な働きかけのおかげで、人が好きで、素直で、明るい「ひょうきん徹ちゃん」と言われる、楽しい子に育ち、地域の方々にご心より感謝いたしております。

しかし、幼児期の子育てに比べ、高校受験や就労問題になりますと、難題続出で、社会の壁は厚いものがあり、落胆することばかりです。

それでも、徹之が「皆と一緒に高校に行きたい」と何度も訴え、また今は「太陽堂で働きたい」と願い、その熱い思いが、親に「がんばろう」というエネルギーを与え、親は高校の門戸を開き、また作業所をつくって就労活動をやらう、という気持ちになってくるのです。そして今、念願の就労へのステップのアルバイトを太陽堂でさせていただいております。

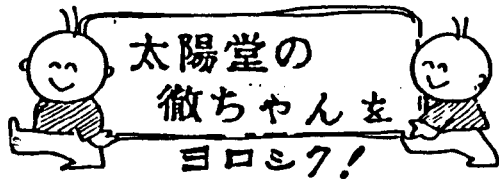


こんちは、明石徹之です。今、太陽堂で働いています。17才で川崎市立川崎高校定時制の3年生です。夜高校で勉強をしています。上手にお話しが聞きなけれど、一生懸命上手に話せるように努力しています。勉強もお仕事もがんばっています。太陽堂はとても楽しいです。おーっと岩瀬さんの所で働きたいです。僕も努力しますので、みなさんよろしくお願ひします。どうぞお店にきて下さい。道であったら、声をかけて下さい。なかなかことばがわからないときもあるけど、笑顔でこたえます。みなさん応援して下さい。

どうぞよろしく。明石 かつゆきより

徹之の子育ては試行錯誤の毎日でしたが、主治医の佐々木正美先生（神奈川県小児療育相談センター）は、「想像以上の成長、発達だ」と喜んでくださっています。

障害を持つ子への差別や偏見に対して、悲しみを味わう以上に、優しい思いやりと力強い支えに出会うことができ、親としては苦勞に勝る充実感と感動を送れます事を感謝いたしております。この度太陽堂文具店でアルバイトをするにあたり、地域の皆様にご理解いただける方法をと考え、「徹ちゃんだより」を発行いたしました。徹之は慣れない場所では、奇異な行動をとり、お騒がせすることもあるかと案じられますが、性格は素直で明るい子で、決して人や物に危害を加えたりすることはありません。もし何かご迷惑をおかけしたりすることがありましたら、どうか叱って下さい。耳からのことばが入りにくいので、どうか前にまわって目を見て大きな声ではっきり言ってくだされば、不得手なコミュニケーションもきちんと成立しますし、叱られることによって、社会性も一つまた獲得できます。どうぞよろしくお願ひします。なおもし感心なことをしましたら思いっきり誉めてくださいませんか。徹之はとても幸福に思うでしょう。（明石洋子）



この度、太陽堂の岩瀬社長の暖かい申し出があり、太陽堂文具店で明石徹之君がアルバイトをさせていただけることになり、明石君はもとよりあおぞらハウスといたしましては、念願のサービス業なので、一同喜んでおります。

障害者地域作業所あおぞらハウスは、障害者が少しでも地域の中で地域の人達と共に生きていくことを目指しています。日本の障害者福祉は、まだ時が浅く障害者への理解は難しいところがあり、一方、障害者の方もハンディ故に社会経験が限定され、社会性に乏しく、誤解されることが多々あります。しかし、障害があってもいろいろな経験を積むことにより、社会性を身につけ、働くことが可能です。だれもが皆、あたりまえに地域のなかで生きていきたいのです。

この度の明石君の初めての就労に際しご理解とご支援のほど、心よりお願ひ申し上げ、寛大なお心で受け止めていただければ、ありがたく争せに思います。（あおぞらハウス運営委員一同）

あおぞらハウス

川崎市川崎区日進町13-23
電話 044-222-7682
245-8295

*会長 杉浦敬司
☎044-333-4087

(文責)*事務局長 明石洋子
☎044-588-4049

*職員 千葉和人
☎0427-96-3099

(職員 千葉さんより)

世の中では、障害者に対して「かわいそう」という見方が、まだ、多く感じられる。ましては、そういう子を持った親も「かわいそうに」と思っている。そういう考え方があるために、直接的な触れ合いが、なかなかできず難しいところもあると思います。今回の配布(徹ちゃんだより)で、どれ位理解を得たのか、私には解らないが、親の子に対する姿勢が、「かわいそう」だからという考えがなく、自己(徹之)を尊重している「こんな見方、こんな付き合い方もあるんだぞ～」って主張してきたのかなと思った。

(明石洋子より)

障害者に対して、「かわいそう」と思うことは、ありがた迷惑なことだという障害者本人の気持ちを、私は、サイドマイド児とスキーに行ったり、脳性マヒの「青い芝の会」の人達とあったりしたときに知りました。「『かわいそう』という哀れみや同情より、むしろ触れ合って理解し、自立するために必要なハンディの部分の手助けをして欲しい。」というのが、本人達の気持ちです。更に「『かわいそう』という気持ちだけで、障害者本人の人権を全く認めようとしなさい、無理解の筆頭は親である。親は、子供を『ふびんだ、かわいそう』と言って、自分の所有物のように扱い、それ故、子殺しさえ起こしてしまう。」とさえ言ってらっしゃいました。

私は、障害を持つ多くの方々と接し、いろいろな意見、考え方を知り、もし、徹之が、自分の気持ちを言えるとしたら、「お母さん、僕を『かわいそう』と思って、過保護にして、社会の人の目に触れないように隔離したり、何にもできない、何にも考えられない人間にするより、たとえ、ハンディがあっても僕が、主体的に、社会の中で、生きていくことのできる人間に育てて、僕の人権を認めて、保障して欲しいなァ」と言うのではないかと思いました。

徹之は、言葉（コミュニケーション）も無く、行動も奇異で、こだわりも強く、社会の中で、主体性をもって自立できる為には、私は、どのように育てればよいか、試行錯誤の毎日でしたが、徹之のありのままの姿を理解し、徹之と共に社会の中に、積極的に、前向きに生きることが、徹之を愛する方法だと思いました。

「かわいそう」と思って、過保護に育てる方が、親として楽でしょう。その子の言いなりに動けば、その子は、いつもごきげんで、親は、外に向かつては、何もしなくていいのですから、でも、それでは、本人のこだわりを強くするだけで、社会のルールも覚えず、人の触れ合いも、趣味や楽しみも獲得できません。社会への自立はおろか、自分で考えることもできず、一生、保護され、規制された生活をする事になり、自分で主体性を持つ生活ができることなど望めません。



ワープロに励む徹ちゃん!

私は、愛情をたっぷり注いだ上で、きちんと社会のルールを教えたいと思いました。愛情を土台にしたしつけは本物となります。ハンディ故に、微々たる進歩で、普通児の10倍も100倍もルールを覚えるに、時間はかかります。それに、例外をつくと、本人が混乱しますから、例外はつくれません。「人が見ているから」とか、「自分が恥ずかしいから」と行った理由で「しつけをやめる」ということをせずに、育てることを心掛けました。できるかぎり、その時の感情で怒ることをやめました。愛情のないスパルタ式は、動物の調教より悪いようです。そうして、育てられた子は、「憎悪」と、そして、自分より更に弱いものへ同じようにする「弱いものいじめ」の気持ちしか引き起こしません。叱ることと怒ることの区別、愛することと甘やかすことの区別を迷いながらも考え行動しました。

「かわいそう」と思うことは、自分が面倒なことをやめる口実。徹之と共に、社会に前向きに生きることを避ける口実だと思っています。

事実、周りの人から、この様な話を聞きました。

「障害を持っている方のお手伝をしたいと思いつつも、障害を持っている子の親は、ちょっと、その子を注意したりしようものなら、『あの人は、思いやがない』・『障害児なのに文句をつける』と逆に非難の目をむけたりする。『弱者は正義』のような風潮なので、注意をしてあげたこっちが、悪いことをしているみたいになってしまう。それでつい『あまりかかわらない方がいいなァ』と哀れみの目で見て、それでおしまい。障害児の親の方が、『同情より理解を』と思わないかぎり、理解する関係なんてつかない。」と話してくれました。本当に、親が「この子は、障害児だから」とかばうのは、「だから、甘やかしました。かわいそうだから、しつけをしていません。」という「親の甘え」なのかも知れませんね。私は、「地域の中で、共に生きたい。」と思いましたが、普通学級で学ばせました。普通児の親と付き合う機会をいっぱい作りましたので、とても、親しくお付き合いをすることができ、その方達は、本

音で話をしてくれました。多くの方が、障害児の親に対して、上記のような気持ちを持っていたのでした。それで、私は、その方々に「徹之には、社会のルールを教えたいので、『こんなことをしたら嫌だなァ、自分の子だったら叱るなァ』と思えるようなことをしていたら注意して欲しい。もし、ハンディ故に困っていることがあったら、手を貸して欲しい。」とお願いしたわけです。その方々は、私の育て方に共感して下さり、おかげで、徹之は、多くの方々から教えを受け、親だけの力をはるかに超えて、多くの社会性を身に付けることができたと思います。

ひまわりの会報に以前書いたことがあります。転^校先^の小学校(小二)の最初の授業参観で、「何故、障害児が、このクラス(普通学級)にいるのか、勉強の邪魔になって困る。」とある親から言われました。その時、私は、悲しさで胸がいっぱいになりましたが、もし、私が、泣き出せば「かわいそうな子を持ったかわいそうな親」という同情しか周りの方には、してもらえなかった



ぬいぐるみに入って サンドイッチマン 徹ちゃん

と思います。同情は、徹之にとっては、少しも幸せなことではありません。だから、私は、勇気を出してお話しさせていただきました。（詳しい内容は、ひまわりの会報に書いてます。）もしかしたら、違う育て方をしている親なら、人から非難されたり、怒鳴られたりしたら「この子のせいで、私はこんなに苦勞している。」とその子を邪魔に思ったり、また、非難する相手には、「私は、こんなに苦勞しているのに解ってくれない。」と怨んだりするかも知れません。脳性マヒの方は、そのような自己本位の親の身勝手さを逆に非難されていました。「子供の人権も、自由も、親が奪っている。」と云われます。上記のような発言をする親に、時々会うことがあります。が、「子供にとっては『迷惑な話だ』と思うのだからなァ。周りの人への理解をその親は、邪魔してるのかも知れないなァ」と思えてきます。

私は、徹之がとても好きです。私が、徹之の人権を尊重することによって、他の人々も尊重して下さいます。徹之が、自分の意志で、自分の人生を切り開く力を持つまでは、親が導いてやらねばなりません。が、それは、少なくとも「かわいそう」と思って、過保護にすることではないと思います。徹之は、私にとって「愛すべき」存在であっても、「かわいそう」な存在ではありません。「かわいそう」と思うのは、徹之に失礼だと思っています。

地域の中で、障害を持つ子供達といっしょの「水泳教室」や「アイススケート教室」を、私が開催したとき、普通学級の父母の方々や子供達が、大勢手伝って下さり、その方々は、初めは「同情」からだったかも知れませんが、すぐに「助け合い、共感する」理解者になりました。ふれあうことで、真の思いやりも芽生え、本当の気持ちも理解できます。「かわいそう」というのは、関係ないものとして遠くから見ているだけ、すなわち、「避けている」ことだと思えます。親が「かわいそう」と思うのも同様ではないでしょうか。親の甘え、「許してもらえ」という一種の逃げではないでしょうか。

障害者本人は、同情より理解を必要としています。徹之と同じ気持ちでいよ

うと思う私は、世間の人に「同情より理解をして欲しいのです。そのためには、出会いの場、ふれあいの場をたくさん作りましょう。」と訴えてきているわけです。同情の関係は長続きしませんが、理解の関係は永遠です。そうして、友達をいっぱい作ってきました。先日の父母会で、杉浦氏が、「親が、差別感を持つことを辞めない限り、就労は難しい。」と言ってらっしゃいましたが、本当に、親が、「かわいそう」と思っている間は、就労など難しいかも知れませんね。同情では、雇ってもらえませんし、長続きもしないでしょう。「理解」してもらうためには、「ふれあう」ことです。故に「地域の中で共に生きる」となるわけですね。

長々と書きましたが、「同情より理解を！」です。私だけでなく、あおぞらハウスの皆様も大いに主張しましょうよ。



「サイン下さい。」 「ハイ、Vサイン」

以上、ある日の連絡帳の一節です。（と言っても4頁分ありました。）

今読み返しますと、何だか偉そうに書いていますね。私も、徹之が、障害児と解ったとき、初めは「この子はかわいそう」と思いましたし、「自分のこれからの人生も不幸だなァ」と嘆きました。また、身体障害と違って、見た目には障害が解りませんから、イタズラする度に、人からは「お宅は、どんなしつけをしているのですか。」と叱られたものです。それにもめげず「この子を生かそう」と前向きに生きていけたのは、周りの方々が、次々と理解ある人にかわり、私達を支えてくれたからです。地域の中に、徹之と共に生きてきたたまものだと思います。おかげで、太陽堂で元気に働き、夜は、雨の日も、嵐の日も、雪の日も、一日も休まず定時制高校で勉強しています。

一見、何もできそうにもみえず、時には、道で小さい子から「1たす1はいくつ？」なんてからかわれたりしているようですが、（そんな時は、きちんと「2です」と答えて、素直な性格をのぞかせます。）絵もピアノも上手で、スキーもスケートも水泳も大の得意で、技術は、親をはるかに越してしまいました。日曜日（2月24日）は、冬山登山に行きます。「余暇を上手に使えるよう、人との接点を多く」と親子でいろいろなことにチャレンジしましたが、今は、自分の意志で一人で、いろいろな行事に参加し、青春をエンジョイしております。今は、もう「かわいそう」なんて思えません。うらやましい位です。徹之は、とっても幸せなのではないでしょうか。

障害者が、不幸なんて思うのは、生きる場が与えられない周りの責任なのではないでしょうか。いろんな生き方ができるよう、就労の場、生活の場を広げていきましょうね。そうしたら、皆、いっそう幸せになるでしょう。

（事務局長 明石洋子）